長崎大学の地域貢献 3

# 危険を未然に防止する

## インフラ長寿命化センターの道守（みちもり）プロジェクト

道路や橋の維持管理や点検のできる人材を育成

地域 → 大学

### 地域を見守る目を育て、増やす

長崎県は離島やへき地が多く、橋や道路、トンネルなどのインフラは劣化も激しく、補修に手間とお金がかかります。そこで長崎大学では、平成十九年にインフラ長寿命化センターを設立しました。その目玉事業として、一般の方々を対象に道路の維持管理や点検のための基礎知識を教え、地域のインフラを見守る「道守（みちもり）」養成があります。このプロジェクト、養成された道守のみなさんが、日々の生活のなかで道路インフラを点検。ひび割れや陥没など問題のある箇所を発見したら、チェックシートに記入してセンターに提出します。センターではその問題箇所を国、県、市などの管理者に通報して速やかに補修し、その結果をフィードバックするという一連の流れになっています。センター長である松田浩教授は語ります。

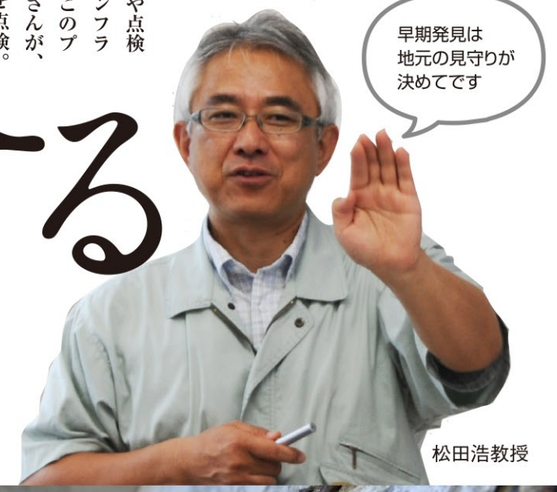
「ごく最近まで、こういったインフラの維持管理は学問体系として存在しませんでした。行政まかせだったんですね。しかし、現実には県内のインフラすべてを行政が監視し、危機を未然に防ぐのは不可能に近い。そういったなかで、アメリカのミネアポリスの橋の事故や山梨の笹子トンネルの事故が起こり、これはいかん、やはり自分たちのまちは自分たちで守ろうという機運が盛り上がりました」。

なるほど、身近に暮らす住民による見守りが一番功を奏すのですね。同じくセンターの森田千尋准教授にもお聞きしました。

「道守は、一般の方でも基礎知識を学んで認定される『道守補助員』から、点検ができる『道守補』、土木建設に関わった経験者が再教育を受けて認定される『特定道守』『道守』など四つのカテゴリーに分かれています。なかには認定試験を突破して上に上がっていく熱心な方もおられます。当初の目標一九〇名に対して、三三九名の方々が認定されているのです」。

活動は全国的にも注目され、NHKや民放の全国ニュースなどでも紹介、土木学会でも先進事例として発表されています。

「一般の社会人だけでなく、平成二十二年からは県内の工業高校でも講座を持ち、地域の点検情報をマップに落とし込むなど、実績をあげています。彼らは優秀ですよ！決まった箇所の点検データを継続して調査することで、行政でも活用されています。指導は道守認定者が買って出てくれることもあり、継続と広がりが期待できます」と森田先生。「センターの仕事は煩雑で大変ですが、考えてみると損傷データが集まることで、より深く有意義な研究が可能になります。道守だけでなく、将来的には川守や海守、山守に広げていきたい」という松田先生の言葉も印象的でした。市や県、国、そして高校や教育委員会と建設業界。バラバラのものが「長崎大学」を軸に有機的に結ばれ、実行力を養っていく素晴らしいプロジェクトなのです。



松田浩教授

高校生も一役買っています。実際の橋の劣化が生きた教材となり、社会に役立つことも実感できます。

点検の実習をする受講者たち。橋を作るなど大きな工事は大手企業が請け負いますが、メンテナンスを地元に発注することで地域の活性化にもつながります。